

移動と距離

—deep into the forest という表現の意味構造—

影山太郎

1. はじめに

移動を表す動詞およびそれに係わる前置詞は、これまで様々な角度から研究されてきた。とりわけ日本語との対比という観点から見て興味深いのは、run や walk などの移動様態を表す英語動詞が自由に起点と着点の前置詞句を取ることができることである。

(1) a. He saw his wife walk to the door.

*?彼は、妻が玄関に歩くのを見た。

b. She walked slowly out of the room.

*彼女はゆっくりと部屋の中から歩いた。

これに対して、日本語の「歩く、走る」などは、方向（「玄関の方へ歩く」）や通り道（「廊下を歩く」）となら共起できるものの、起点ないし着点を直接に従えることはできない。そのため、(1) の日本語文では「歩いて行く、歩み出る」のような複合動詞が必要になる。この日英語の相違を説明するために、影山（1996 a）および影山・由本（近刊）では、日本語が複合動詞という形態的な合成を利用するのに対して、英語は概念構造において移動と到達という2つの事象を合成するという考え方を提出した。

(2) 英語における概念構造の合成

移動

到達

[x MOVE] + [x BECOME [x BE AT-z]]

She walked

to the door

これによれば, *She walked to the door.* という文は *She walked.* という移動動作と, *She got to the door.* という位置変化で構成された複雑事象として捉えられる。

このような合成が概念構造で起こっていることは, 次のような距離表現の現れ方から裏付けられる。

(3) a. *He walked 500 meters to the station.*

b. 彼は駅へ 500メートル 歩いた。

(4) a. *they had rolled a few hundred yards onto the clay lake bed* (Arthur Miller “The Misfits”)

b. 湖底へ 数百ヤード 転がった。

(3 a) の英語は, 「500メートル歩いて駅に着いた」つまり「元の地点から駅までが500メートルで, その距離を歩いて行った」という意味になる。ここでは, 500メートル歩くという移動と, 駅に着くという結果が1つの文の中に凝縮されている。ところが, この解釈は (3 a) を日本語に直訳した (3 b) からは得られない。(3 b) は, 駅の方に向かって500メートル歩いたということで, 駅はまだその先にある。(もちろん英語でも, *toward* を用いて *He walked 500 meters toward the station.* とすると, 日本語と同じ解釈になる。) (4 a) と (4 b) も同じように, 数量詞の解釈が異なっている。(3 a) と (3 b) の違いを図解してみよう。

(5) 英語

起点 ——— 500 meters ———→ station

日本語

起点 ——— 500メートル ———→ 駅

ここで英語の *walk to the station* という表現が移動と到達を一体化していることが理解される。

さて, 同じく距離表現であっても, 次の下線部は上述の到達範囲を表す表現とは異なるように思われる。

(6) a. Reaching the lip of a high meadow, ... When they had come fifty yards into the meadow, his father turned... (David Quammen “Walking Out”)

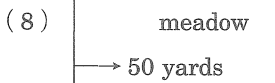
b. I kept pushing [the car] until we were twenty yards into the cover.
(Richard Ford “Rock Springs”)

(7) a. 部屋に 2～3 歩 入ると、突然大男が現れた。

b. 森の中に 10 メートルほど 入ったところで、一匹の鹿に出くわした。

(6) の *fifty/twenty yards*, (7) の「2～3 歩, 10 メートルほど」は、見かけ上は、先の「500 メートル」と変わらないが、述語が先の「歩く」*walk* に対して「～に入る」*come into* であることが違っている。

日本語の「入る」は着点重視の動詞であるから、「～を」という経路は取らない(*廊下を部屋の中に入った)。従って (7 a) の「2～3 歩 (入る)」という表現は、例えば「廊下を2～3 歩あるいたところで転んだ」に見られるような経路上の進行距離と同一視することはできない。このことは、「2～3 歩」が表す内容からも納得することができる。つまり、「廊下を2～3 歩あるく」の「2～3 歩」が廊下の進んだ距離を表すのに対し、(7 a) の解釈は「部屋の入り口から室内へ2～3 歩進んだ」ということである。英語の場合でも同様に、前述の *He walked 500 meters to the station.* は駅に着くまでの500メートルを歩いたという意味であるが、(6 a) の *come fifty yards into the meadow* は (8) に図示するように、牧草地の入り口から中へ50ヤード進んだという状況である。



このような着点内部での進行距離を表す表現は、これまで数ある移動動詞の研究においても見過ごされてきたように思われる。以下では、(6)(7) に例示される距離表現の性質を概念構造の観点から明らかにしていく。

2. 前置詞 into の概念構造

従来、空間位置を表す前置詞の意味を分析した研究では、あらまし次のような意味構造が仮定されてきた (Leech 1969, Bennett 1975, Gruber 1976, Jackendoff 1983 など)。

(9) at=AT	to=TO AT	from=FROM AT
on=ON	onto=TO ON	off of=FROM ON
in=IN	into=TO IN	out of=FROM IN

とりわけ into という前置詞の意味構造は、off of, out of との平行性を重視して、単に TO IN (つまり「~の中に」) と分析されてきた。ところが、into は単に TO IN と表示するだけでは済まされない性質を持っている。

まず、純粹に着点を表す to は特別に対照や強調の意味がない限り、強勢 (stress) なしで発音される。同じことは onto にも当てはまる。

(10) a. Bill walked to the station.

b. We wandered onto the village. (Talmy 1975 : 214)

これに対して、経路 (path) ないし方向性を表す副詞は強勢を持つのが普通である。

(11) a. John walked along.

b. John walked over to the station.

ところが不思議なことに、into は前置詞であるにも拘わらず、強勢を持つのが自然である。

(12) a. John walked into the house.

b. ? John walked into the house. (Talmy 1975 : 212)

この音韻的特徴を考慮すると、into は単に着点を表すだけでなく、何らかの経路ないし方向性の概念をも含んでいると推測することができる。Talmy (1975) は、walk into the house というのはいわば walk in into the house ということであり、英語ではこのような表現はできないが、ドイツ語などでは

副詞の *in* に相当する表現形態が現れるを指摘している。

- (13) Er ging ins Haus hinein. (Talmy 1975: 212)

he went into house in

そこで、英語の *into* の概念構造を次のように仮定してみよう。

- (14) FROM-ENTRANCE-of-X TO-INSIDE-of-X

into

(14) は、「X の入り口 (ENTRANCE) から X の内部へ」という意味である。この概念構造を先の例 (6) (7) に当てはめると、(6 a) の *come fifty yards into the meadow* というのは牧草地の端 (入り口) から牧草地の中へ 50 ヤード進んだということであり、(7 a) の「部屋に 2~3 歩入る」というのは部屋の入り口から内部に 2~3 歩足を進めたということである。このように *fifty yards* や「2~3 歩」という数量表現は、入り口——あるいは境界 (BOUNDARY) と呼んでもよいだろう——から内部に向かって進んでいく距離を示している。

(14) の概念構造は、従来の考え方 (9) と比べて、FROM-ENTRANCE-of-X という始点を設けている点が特徴的である。この始点は統語的には具現されないのが普通だが、次のように明示することもできる。

- (15) a. 泥棒は裏口から家の中に入った。

b. The burglar entered the house by the back door.

FROM-ENTRANCE のような構造が必要であることは、距離表現の在り方からも支持される。当然のことながら、距離を測定するためには何らかの基準点が必要である。

- (16) a. Philip took up his stand some four yards away from the woman. (David Lodge, *Changing Places*)

b. The Sussex campus, ... at the foot of the South Downs a few miles outside Brighton (David Lodge, *Nice Work*)

c. He walked fifty yards toward the cottage.

d. Wind blew the gas and carried it hundreds of yards away.

(David Lodge, *Changing Places*)

測定の基準点は (16 a) の *from the woman*, (16 b) の *outside Brighton* のように統語的に明示されることも, (16 c, d) のように表だって現れないこともあるが, 明示されない場合でも基準点はコンテキストから理解される。このことからすると, (6) (7) の例においても何らかの基準点が存在することになるが, この場合は単に文脈から推測されるのではなく, *into* で表された場所の内部での移動距離であることが明確に含意されている。**FROM-ENTRANCE** というのは, この基準点を表示している。

Gruber (1976: 76) は, *into* が着点だけでなく, 内部への方向を表す用法も持ち合わせていることを指摘している。つまり, *to* に対して *toward* が存在するのに, *into* に対しては **intoward* のような形態がないから, *into* は「～の中の方へ」という意味も持つことになる。この意味は (17) の例に見られる。

(17) John aimed into the room.

cf. **John aimed to the room.*

Gruber は (17) の *into* を ‘*along a path which goes into*’ と分析しているのだが, *toward X* の場合はまだ *X* に到達していないのに, *fifty yards into the meadow* の場合は既に牧草地に到達していて, *fifty yards* はその牧草地内部での進行距離を表すという違いを見逃してはいけなない。従って, *into* を単に **TOWARD-INSIDE** のように表記するだけでは不十分であり, **FROM-ENTRANCE-of-X** を付け加えて, *X* の領域に既に入っていることを示すことが必要なのである。

3. 内部への移動を表す *deep*

内部への進行距離は具体的な数量詞だけでなく, *deep* という副詞でも表現される。

(18) a. While going deeper and deeper into the Night Forest, he began

- to feel hungry. (*The Neverending Story*)
- b. A bull drives its horns deep into a bullfighter's chest (COBUILD Word Bank)
- c. Lean your head deeper into the sink. (Stanley Elkin "A Poetics for Bullies")
- d. He shook his head... and put his head deeper into his arms. (E. Hemingway, *The Sun Also Rises*)
- e. Youths... with hands thrust deep into their pockets, ... (David Lodge, *Nice Work*)

これらの例の deep は、外部から into の空間領域に入っていく程度を表しているが、重要なのはこれらの空間がいずれも内部 (INSIDE) と呼べる部分を持つことであり、そこには内部と外部との境目がある。我々は、この境目を ENTRANCE という概念で総称しているわけである。

伝統文法では、このような deep を形容詞とするか副詞とするかで意見が分かれるが、重要なのは品詞よりむしろ、その働きである。次の例に見られるように、この用法の deep は具体的な距離表現の代わりとして働く点に注目しなければならない。

(19) a. They went fifty yards into the forest.

b. They went deep into the forest.

c. *They went fifty yards deep into the forest.

つまり、deep は具体的な数字を示さないものの、fifty yards と対等の資格を持っている。従って、(19 c) のように具体的な距離と deep を同時に使うことはできない。その点で、(20) のように単なる深さを表す用法の deep と明らかに異なっている。

(20) there was a large pool all round her, about four inches deep (Lewis Carroll, *Alice's Adventures in Wonderland*)

また、言うまでもなく、問題の deep は様態副詞としての deeply とも性質を異にする。

(21) a. The premodern Japanese was deeply concerned with honor and face (E. Reischauer, *The Japanese*)

b. He lights a cigarette, inhales deeply, and... (David Lodge, *Nice Work*)

(21) の deeply は動詞ないし動詞句を修飾している。次の delve deep/deeply into のように、同じ動詞が deep, deeply のいずれとも共起する場合もあるが、やはり両者には前述のような意味機能の違いが感じ取れるだろう。

(22) a. Seles had to delve deep into her reservoir of experience to overcome the crisis. (COBUILD Word Bank)

b. the Japanese delved deeply into Confucian doctrines (E. Reischauer, *The Japanese*)

deep が移動距離を表すことは日本語との比較からも窺い知ることができる。

(23) a. 森の中に 20 メートル入った。

b. 森の中に深く深く入って行った。

c. *森の中に 20 メートル深く入った。

先に (3) (4) で指摘したように、日本語の距離表現は移動範囲だけを表し、目的地に到達したことは意味しないのが普通である。ところが、(23 b) では実際に森の中に足を踏み入れていて、「20 メートル」は森の内部での進行距離を表している。従って、この構文は移動と到達の合成によって生じたものではない。その上、英語の場合と平行的に、「深く」という表現が具体的な距離に取ってかわることができ (23 b)、この「深く」は数量詞と共起できない (23 c)。

このように、deep into X の deep は into が持つ「X の入り口から内部へ」という意味構造を修飾する表現であると位置づけられる。従って deep into という表現は、「入り口」と称せる部分を持つ対象に限られる。具体的に言うと「部屋、森、ポケット、心、暗闇」のように、物理的あるいは心理的に三次元的な内部空間を持つと認識されるものである。そのような空間の内部で奥行き

が広いことを「深い deep」と表現する。

ただし三次元的空間であっても, through は deep で叙述できないことに注意したい。

(24) a. *He walked deep through the forest.

b. He walked fifty yards through the forest.

through は物体内部での連続的な移動の経路 (VIA INSIDE) を意味し, 「入り口から内部へ」という方向性を持たないから, (24 a) は不適格となる。また, (24 b) のように数量詞を付けることはできるが, この場合, 森の内部のどの部分でもよく, 「入り口から」というわけではない。このように, through との対比においても, into が特別な意味概念を含むことが分かる。

三次元に対して, 一次元 (at~, to~) と二次元 (on~, onto~) には「内部」と呼べるものがないから, fifty yards や deep といった距離表現を付けることができないことが予測される。まず, at について次のような表現が成り立たないことは明らかである。

(25) a. *The tourists arrived a few steps at the hotel.

(「ホテルに到着して, その中に 2~3 歩足を踏み入れた」という意味)

*旅行者はホテルに 2~3 歩到着した。

b. *The tourists arrived deep at the hotel.

*旅行者はホテルに深く到着した。

to も同様で, 着点が一点として捉えられているために, 数量詞はその内部への進行を意味することができない。先に He walked 500 meters to the station. という例を挙げたが, これは駅に到着したあと, その駅の構内を 500 メートル歩いたという風には決して解釈できない。500 meters が the station の内部を修飾するのではないのと平行的に, deep も to the station を修飾できない。

(26) a. *He walked deep to the station.

b. *彼は駅へ深く歩いた。

また、物体の表面を問題にする *onto* の場合も「内部の進行」という意味は生じない。

(27) a. He jumped one meter onto the desk.

b. *彼は机の上に 1 メートルとびのった。

(27 a) の解釈は *walk to the station* の場合と同様で、ジャンプした高さが 1 メートルという意味である。決して机の上に飛びのってから 1 メートル進んだということにはならない。これを直訳した日本語 (27 b) は不適格である。当然のことながら、表面には深さがないので、*deep* も排除される。

(28) a. *He jumped deep onto the desk.

b. *彼は机の上に深く飛びのった。

この点で、同じく距離を表す *far* は異なる振舞いを見せる。

(29) a. It goes far beyond the needs of the usual private owner.

b. the [oil] price remains far below that of any other industrialised nation

c. We had been pushed too far onto the sand for the lifeboat to approach sufficiently to get to a towing line to us.

(以上の例は COBUILD Word Bank)

(29 a, b) に例示されるように、*far* は *beyond*, *below*, あるいは *from* などで示された基準点からの距離を表し、これは *We walked four miles.* のような経路上の距離を表す数量詞と同じ性質である。(29 c) の例でも *far* が主語 (*we*) が押し流された距離を指し、砂の上 (*onto the sand*) を進んだ距離を述べるのではない。

ただし、前置詞が *into* の場合には *far* も *deep* と同じように内部空間への移動距離を表すことができる。

(30) a. They went far into the forest/desert.

b. John threw the bomb far/six feet into the tunnel. (John Ross の例: Geis (1970) に引用)

c. we talked far into the night about her possibilities (LOB: K 23)

85)

into という前置詞の意味を FROM-ENTRANCE TO-INSIDE とすれば、この far の意味合いも正しく予測することができる。

4. 静止位置を表す deep

以上では、内部方向への動きがある場合を述べてきたが、動きを伴わない静止状態はどうだろうか。前述の概念構造では into は FROM...TO-INSIDE と規定されたから、deep が現れるのは、内部への動きがある場合だけに限られ、静止状態では用いられないことが予測できる。この予測は、少なくとも日本語については当たっている。

(31) a. *仙人の住みかは森の中に深くある。

*仙人の住みかは森の中に 500 メートルほどある。

b. *魚たちは海の中に深く住んでいる。

*魚たちは海の中に 200～300 メートル住んでいる。

「ある、住んでいる」という動詞は状態を表し、「深く」や「500 メートル」などと結び付かない。

なお、下例のように「深く」が「中」という名詞を直接に修飾する用法があるが、これは問題の距離表現とは意味が異なっている。

(32) a. 仙人の住みかは森の中深くにある。

b. 魚たちは {海の中深く／海底深く} に住んでいる。

この「深く」は「内部の深いところ」という 1 点を表し、動きの距離を描写するのではない。この違いは次の 2 文から明らかだろう。

(33) a. 先生の話は、心の中に深く染み込んだ。

b. 先生の話は、心の中深くに染み込んだ。

(a) の「深く」は染み込むという動きの程度を表すが、(b) の「深く」は心の中の深部という一点を指す。両者の差異は、動きを表す場合だけ「深く深く」(deeper and deeper) という重複が可能であるという違いにも反映され

る。

(34) a. 心の中に深く深く染み込んだ。

b. *心の中深く深くに染み込んだ。

(34 b) は心の中の一点を指すから、「深く深く」という重複と意味的に矛盾をきたす。

深部の一点を指す用法は英語の deep にも見られる。

(35) a. they live deep down in the earth. (*The Neverending Story*)

b. everything is going on deep down inside you. (COBUILD Word Bank)

c. Gavin Ambrose had not changed much deep down inside. (COBUILD Word Bank)

d. His light blue eyes, set deep within the face, are actively and continually looking. (Brown: G 12 0330)

これらの例では、deep down あるいは deep within という結び付きが「～の深いところ」という意味を表し、特に (c) の deep down inside は「心の底で」という慣用句になっている。この deep は down あるいは inside を補足するだけであるから、日本語 (34 b) と同様に、deeper and deeper (だんだんと深く) に置き換えることができない。このように静止位置を表す場合は、概念構造では FROM...TO...ではなく、AT-DEEP-POINT-of-INSIDE X のように表示できるだろう。

deep が深部の1点を指す用法は、deep の前に from ないし to という前置詞が付く構文にも見られる。

(36) a. [Wishes] come from deeper within us than good or bad intentions. (*The Neverending Story*) 心の中のもっと深いところから

b. the glitter of mica...seemed to come from deep inside the stone (Ursula K. Le Guin "The Stars Below")

c. The Germans were not best pleased about this, and from here to deep in the second half they put on a show. (COBUILD Word

Bank)

これらの例では、deepの前に前置詞があることから、deepが内部の1点を描写していることが分かる。

以上では、内部方向への移動距離を表す deep と、深部の1点を指す deep との区別を指摘した。この差異は deep in thought と in deep thought という2つの表現で顕著になる。

(37) a. The philosopher was in deep thought.

b. The philosopher was deep in thought.

(37 a) の deep は thought を修飾する形容詞に過ぎないが、(b) は「深く没頭する」という動きの意味合いを含んでいる。類似の例は (38) にも見られる。

(38) She appears to be deep in conversation with herself. (COBUILD Word Bank)

では、deep in thought のような場合、なぜ in が動きを含意できるのだろうか。ここで重要なのは、英語に特徴的な結果指向の表現法である。しばしば指摘されるように、日本語が動きないし過程に焦点を置いた表現法を用いるのに対して、英語は過程のあとの結果としての状態に焦点を絞って述べる傾向がある。(39) の下線部を見比べれば、この違いは明らかだろう（詳しくは影山 (1996 b) を参照）。

(39) a. AND THEN THERE WERE NONE (Agatha Christie の小説)

そして誰もいなくなった

b. She is suddenly awake in the middle of her worst nightmare.

(Carol Anshaw “Hammam”)

彼女は、悪夢の最中に突然目を覚ました。

c. Boil for 3–4 mins until (it is) syrupy. (料理書)

シロップ状になるまで 3~4 分ゆでる。

日本語が「なる」や「行く」などの動詞で変化の途中過程を描写するのに対して、英語はすべて be 動詞を用いている。be 動詞は静止状態を表すから、結

局、英語は変化の途中経過を抜きにして、その結果だけに着目していることになる。

このことを *into* と *in* に当てはめると、*deep in thought* の場合、本来なら *into* で動きを表すべきところを、結果位置だけに焦点を絞って *be* 動詞と *in* で表現している、ということになる。実際、次の (40 a, b) のように動詞が *be* であるのに、前置詞は *into* のまま残ることもあるし、また、(40 c) の *thrust* や *put* などの動詞では、*in* と *into* が交替可能である。

(40) a. Heather is deeply into film, particularly old foreign films (Carol Anshaw “Hammam”)

b. I was deep into a weighty philosophical debate with my conscience (COBUILD Word Bank)

c. He thrust his hands deep into/in his hands. (*Cambridge International Dictionary*)

以上のように、英語では物理的には動きがある場合でも、それを視野から外し、むしろ結果位置／結果状態のほうに焦点を絞り込んで表現するという、結果指向の傾向があるから、本来なら移動 (*into*) についてだけ用いられる *deep* が、静止位置を表す *in* と一緒に現れることになる。従って、このような場合でも概念構造は前節で設定した FROM...TO...で処理することができるだろう。

最後に、これまでとは逆に、内部から外部への移動——すなわち *out of* の場合——はどうなるのかを考えておこう。

(41) a. The frog sank deep into the pond.

b. *The frog jumped deep out of the pond.

*蛙が池の中から深く飛び出した。

into と異なり、*out of* の場合は *deep* で修飾できない。この事実も先に示した概念構造から自動的に説明することができる。すなわち、*deep* は *into* が表す FROM-ENTRANCE-of-X TO-INSIDE-of-X という距離を描写する表現であるが、これに対して、*out of* という前置詞は物体の境界面から外部への移動

(すなわち, NOT-AT-INSIDE あるいは FROM-INSIDE) を意味し, into の「内部進行」の概念に相当するものは含んでいない。従って, deep が描写するはずの部分がもともと欠如していから, *deep out of X という言い方は成り立つはずがないのである。

ここでも far との対比が示唆的である。先に触れたように far は起点からの移動を表すだけであるから, out of と結び付くことができる。

(42) a. Its tongue hung far out of its mouth.

b. Stretching his tongue far out of his wide-open gullet, he boomed
in his bronze-bell voice

(2 例とも *The Neverending Story*)

5. む す び

小論では, into という前置詞が他の to や onto と異なる性質を持つことを, 内部進行を描写する距離表現と deep の現れ方に基づいて論じてきた。点, 線, 平面と比べると, 立体は人間の生活において特別の働きを担うことが多いから, その内部を描写する into という前置詞の概念構造は, 他の前置詞の概念構造と異なる構造を持っても不思議ではない。本論では, その特別の構造を FROM-ENTRANCE TO-INSIDE という形で表示した。この意味構造(とりわけ FROM-ENTRANCE の部分)は普通は表だった形で表現されないものの, 距離表現や deep の生起によって, その存在が確認される。

伝統的な英文法では, 本稿で扱ったような deep はほとんど論じられたことがない。たとえ取り上げられたとしても, せいぜい「この deep は形容詞か副詞か」といった品詞論で終わっていた。しかしここで真に重要な問題は, deep の品詞ではなく, それが文の解釈にどのような働きを担っているかという意味機能である。それを明らかにするためには, 概念構造という意味構造を仮定し, その中のどの部分を修飾するのかを明確に示すという方法が必要になるのである。

参考文献

- Bennett, Michael (1969) *Spatial and Temporal Uses of English Prepositions*. Longman.
- Geis, Michael. (1970) "Time Prepositions as Underlying Verbs," *CLS* 6: 235-249.
- Gruber, Jeffrey (1976) *Lexical Structures in Syntax and Semantics*. North-Holland.
- Jackendoff, Ray (1983) *Semantics and Cognition*. MIT Press.
- 影山太郎 (1996 a) 「日英語の移動動詞」『英米文学』40: 2, 91-121. 関西学院大学英米文学会.
- 影山太郎 (1996 b) 『動詞意味論——言語と認知の接点——』くろしお出版.
- 影山太郎・由本陽子 (近刊) 『語形成と概念構造』研究社出版.
- Talmy, Leonard (1975) "Semantics and Syntax of Motion," in John Kimball (ed.) *Syntax and Semantics* 4, 181-238. Academic Press.

辞書およびコーパス

- The Brown Corpus and the Lancaster-Oslo-Bergen Corpus* on the ICAME CD-ROM. 1991. Norwegian Computing Centre for the Humanities, Bergen.
- Cambridge International Dictionary of English*. 1995. Cambridge University Press.
- Collins COBUILD on CD-ROM*. 1995. Harper Collins.